

2025年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書			2026/9/30	
団体名	一般社団法人Life is	活動タイトル	重症児者とその家族及び地域住民が共に過ごし、互いにエンパワメントし合う事業	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■活動風景	
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	当法人の実現したいビジョンは「日常生活の景色を多様にする」です。 医療的ケア児や重症心身障害児といった様々な障害や背景にあっても、自分なりの豊かな日常生活の景色を生み出していけるコミュニティに身を置く事が大切だと考えておりますが、現状は多くの場面で区別され、時には疎外を受けてしまう状況に陥っています。そういった状況の中で「障害者-健常者」「利用者-支援者」といった画一的で一方的な関係性ではなく、「同じ地域で暮らす対等な市民同士」という関係性を紡いでいけるような地域社会を共に作っていく事が望ましいと考えております。			
	医療的ケア児者や重症心身障害児及びそのご家族様が、その障害や背景などに影響を受けることなく、安心して日常生活を営んでいけるような基盤を地域住民と共に作っていきます。 その為には障害福祉サービスである児童発達支援や放課後等デイサービス、生活介護の事業を通して心身に安定した生活を提供していくと共に、カフェを運営し働かたくても働く事を諦めてしまっているご家族様(特にお母様)に対しての就労場の確保を行っていきます。 また、重症児者と地域住民が自然な形でタッチポイントを得られるよう、駄菓子屋やジューススタンドの運営等を通じて場を日常的に開いていくと共に、イベントの企画運営を行っていきます。			
	●人的資源：専門職としての専門性発揮だけではなく、自身の市民性を発揮していく事で、ご利用者様やご家族様、地域住民と「1人の市民同士の関係性」を紡いでいける人が望ましい ●物的資源：医療的ケア児が緊急時にも命を紡いでいけるような備品(電源等)は必要不可欠。発災時に必要な備品や意思伝達支援としてICT機器や移動を支える福祉車両の整備も必要。 ●望ましい活動資金：寄付や助成金はもちろんですが、障害福祉サービスにおける報酬の充実が望まれる。重症児者の受け入れ、活動の充実を図る為には指定基準の人員だけでは到底足りるものではなく、その部分における評価は必要と感じている。 ●望ましい情報：事業情報について、個人情報に気を付けつつ地域と共有し、循環の促進を図る。			
■活動報告			■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)	
本事業では、多摩市の商店街にある拠点「多機能循環の場modoki」を舞台に、医療的ケア児者・重症心身障害児者とそのご家族、地域住民が「同じ地域で暮らす市民同士」として出会える場づくりに取り組みました。2025年11月にコミュニティダイニングをオープンし、これまで当法人が出会えていなかった街の方々と関わり合いが生まれています。地域の方と共にイベントや空間をつくることを大切にしており、食事に来た方が商店街イベントの出店者になる、地域の学生がスタッフとして働き始めるなど、「お客さん」「支援者」といった役割を固定しない関わりが広がっています。医療型特定短期入所は2026年3月に竣工し、東京都や保健所と協議を重ねながら開所準備を進めています。正式な受付前にもかかわらず約10家族から利用希望が寄せられ、ご家族との対話会を通して、寄せられる期待の大きさを改めて実感しました。			・短期入所の開設準備：3月に竣工しました。東京都としてほぼ前例のないサービス形態のため協議に時間を要し、期間内の開所には至りませんでした。一方、利用希望の申し出は約10家族となり、目標（10家族以上）にほぼ到達しました。 ・関わりしろの設置：イベント等を計11回実施し（外部出店も含む）目標（年3回程度）を上回りました。医療的ケア児者やそのご家族と、名前を知り会話する間柄になった地域の方が約5組生まれています。 ・関係機関とのネットワークング：月1回以上の意見交換を継続。場を使って自分のやりたいことを始めた人が7人（うち3人は医療的ケア児者のご家族）、この場に共感して働き始めたスタッフが6名となり、目標（主体的なプレーヤー3人以上）を大きく上回りました。 ・活動基盤の強化：短期入所が未開所のため、収支の黒字化は達成できていません。顧問弁護士・税理士の協力のもと規程を見直し、持続的な運営の土台となるガバナンス強化を進めました。	
■事業を通じて得られたノウハウ			■望ましい社会状況を達成するための課題	
・工事前のスケルトン状態の場を共有したり、椅子・テーブル・看板づくりのワークショップを行ったりと、未完成の時間を共にし、開設までの過程をひらくことで、完成前から関わってくれる人との関係性が生まれ、共に創り上げる空気を作ることができました。 ・普段は「支援者-利用者」としての出会いが多い当方人の他サービスのご利用者様やご家族様と、支援の場ではなく、飲食店という日常の場で出会うことで、「対等な市民同士」として関係性を紡ぎなおすことができました。 ・福祉を前面に出さない事業形態だからこそ出会えたまちの方々と関係性を構築していく中で、今ではイベントを共に創る仲間になってくれており、医療的ケア児者やそのご家族との出会いも生まれました。			・医療型特定短期入所は東京都でもほぼ前例のないサービス形態であり、手続きに時間を要しています。必要としているご家族に速やかに届けるため、行政との連携を一層深めていく必要があります。 ・「同じ場にいる」状態は生まれつつありますが、そこから対等な対話や更に関係性を育むための導線づくり、共に場を担うコアな仲間づくりが次の段階です。 ・まだまだ、つながりが地域づくり・福祉の領域に偏っており、他領域と重なるテーマでの講座や対話会を通じて、関わりの幅を広げていくことが求められます。 ・制度外の取り組みを続けていくため、収支の安定が引き続き課題です。	
■活動成果のアピールポイント（自由記入）			■活動成果のアピールポイント（自由記入）	
この1年間の活動を通じて			まちとの接点が少なかった重症児者が地域住民と自然な形で関わり、その家族もイベントなどで提供者側に回るという当たり前の関係性を築くこと	を達成しました。
■受益者の具体的な変化（自由記入）			■受益者の具体的な変化（自由記入）	
重症児者自身もイベントに参加し、普段はお客さん的な関わりの多い家族も出店等を通じて提供者側に回るなど、受け身の振る舞いが少しずつ能動的なものに変容しつつある。			重症児者自身もイベントに参加し、普段はお客さん的な関わりの多い家族も出店等を通じて提供者側に回るなど、受け身の振る舞いが少しずつ能動的なものに変容しつつある。	